書誌紹介

渡辺澄夫著「畿内庄園の基礎構造」を読む

清原貞雄

著者が広島文理大に入学以来二十年間専心刻苦精励此の問題の研究を続けた結果大成したのが、この尨大なる著述である。

終戦後我が国史学の発達は誠に目覚ましいものがある。その一端として経済史的研究の進歩が見られる。否むしろ経済史的研究をもつて国史学研究の重点とした事が、戦後の我が国史学発達の素因の主なるものであるといえるであろう。斯くいつたからとて流行の唯物史観が正しいというのではない。重要であるという事と全部であるという事とは違う。唯心史観が観念論的に原則を立て、史実を無理に合せようとする事が正しくないと同様、唯物史観も亦一面論的のものである所に誤りがある。歴史現象は複雑多岐でかかる観念論的かつ一方的法則では説明の出来ない多くの事実のある事は、ある一つの成心に囚われず虚心坦懐に史実を見れば判るはずである。それはともかくとして歴史研究に経済史的考察の重要な事は勿論であり、従来の国史研究にはそれが不十分であつた事は争われぬ。また一体に下部細部の研究が備わらず、上層的大観的な見方の上に国史学が構成せられて居つた。これは史学の未発達の場合には止むを得ざる事であるが、その次には当然下部細部の研究に入るべきで、それが進んだ後これを基礎として再び大観的な国史が構成せられて始めて完全なものが得られるのである。この意味において戦後経済史的考察に努力すると共に地方史の研究が興隆した事は国史学の画期的な発達に資しつつある。渡辺教授の研究は正しくこの新傾向に沿い、またこれを代表するともいうべきである。

教授の研究は畿内における大乗院領、春日神社領、東大寺領、醍醐寺領、久我家領、長福寺領、青蓮院領、徳禅寺領、摂関家大番領等の諸庄園についてのもので就中大乗院に関するものはその四分の一強を占めて居る。初めの五十頁は序論であるが序論であると同時に此研究全体の結論でもある。その才一章に庄園研究の視点を何処に置くべきかを論じ戦前までのものが、法制史的、社会経済史的伝領的研究を中心として居るのに対して、戦後はこれを社会科学的に研究する事によつて歴史現象の一切階級対立の具象である政治に凝集し、かくて歴史は全構造的な高次の政治史なりとするに至つた事、また従来孤立的であつた地方史が新に日本史の基礎単位として史学の中に正しい位置を与えられた事を指摘し渡辺氏の研究もまたこの線に沿うて行われている。また現在一部に、理論や法則の定立を急ぐの余りややもすれば個々の実証が軽視せられる傾向あるを不可とし、先ず才一に庄園そのものの実体を分析究明する事に力を注ぐ要を強調し、特に庄園内における土地所有乃至農業経営の単位であり、かつ收取の基礎単位である名（みょう）の構造分析に焦点を置き、その性格、機能の解明に主力を注ぎ、従来名については発生論的または農奴制創出の観点から分解過程が論ぜられたに対して、名そのものの実態を暴露すると云う難問に取組む事を目的として居る。「要するに本書の志向する所は政治史的観点から庄園制を考察する立場から一歩後退して庄園制自体に帰り、庄園制そのものの分析を通し庄園制から政治

史を検討しようとするにある」と云う著者自らの語を引用する事が、此の性格を最もよく示すと思う。

第二章においては畿内庄園研究の現状を叙し、その課題として庄園領主の土地領有形態名主（みょうしゅ）作人の土地所有並に用益形態、庄園領主の收取並に支配形態を指摘して居る。

かくして畿内における庄園の基礎構造をその一々の場合についてこれまでの広汎な諸研究を活用しつつ、更に根本史料を駆使して、従来なお不明であった点を徹底的に究明する事を試み、これによって主として中世史の研究に一の照明を掲げる事を志向したものである。著者も指摘して居る如く、庄園は夫々地域的の特色を有して居って畿内の庄園だけで全国を推す事は出来ないが、其の特色は各地に於ける特殊な政治的発展を解明する鍵となるもので、地方史研究の意義も其処にある。

また各地庄園には夫々地方的特色があると同時に多くの共通点もあるので、畿内庄園の研究がそれ自身だけの独自的な意義を有するに止まらないゆえんである。各地方において此の研究に追随する研究が夫々の学者によって遂げられるならば、日本中世史の研究は一大飛躍を見るであろう。（吉川弘文館発行菊版七六四頁索引三六頁、定価一三〇〇円）

日本文化風土記　九州篇

大分県の歴史・民俗に関する論考は左の通りである。

「六郷満山の仏教芸術」・「府内のキリシタン文化」・「特別史跡臼杵石仏」（久多羅木儀一郎）、「物々交換の万弘寺市」・「若衆の樽入れ」・「青の洞門」・「直入町長湯のキリシタン墓」・「竹田の洞窟礼拝堂」（半田康夫）、「納屋部落（杵築市）の村落構成」・「九重山麓の婚姻習俗」・「奥祖母の正月」（藤原正教）（河出書房発行、定価五五〇円）（H）

杵築史談　第二号

「高世撰題歌集とその門下」（松本義一）、「郷土史の検討（其一）高橋作左衛門」（土居寛申）、「生地碑並に石殿に就いて」（原山道正）、「杵築の人形芝居」（加藤柾）、「杵築地方の金石文（臼杵築菅廟碑その一）」（須藤金夫）等の論考・史談を掲載し、特に本誌を特色づけるものとして、「子の日の松について」（阪西孝一）、「杵築の伝説」（平松陽子、入江英親）の民俗関係の資料もかなり取入れられている。（杵築市公民館内、杵築史談会発行）（H）

竹田市史談会報　第四号

西南戦役八十周年記念号として、竹田を中心とする西南戦役史が、同市立図書館長北村清士氏によって詳細に説かれている。（竹田市史談会発行）（H）

NHK大分放送局
郷土資料調査委員会

調査報告　一号、二号

一号は大野郡朝地町、二号は佐伯市の調査についての報告書で、一号には、「普光寺の石仏」・「池田の遺跡」（賀川光夫）、「朝地町とキリシタン」・「深山八幡宮」（立川輝信）、「神角寺の蛇神」（松岡実）、「キリシタン墓？」「朝地のイノコ」（半田康夫）等の考古・歴史・民俗関係の調査報告を掲載、二号には、「佐伯文庫の遺本について」（久多羅木儀一郎）、「佐伯市に於ける二仏像と大曼陀羅」（賀川光夫）、「大入島の神ノ井とトンド」（加藤数功）、「佐伯市を訪ねて――独歩文学散歩――」（田吹繁子）、「佐伯とキリシタン」・「雅衍に就いて」・「臼杵流行のちょんがれ」（立川輝信）等を収めている。（H）

物集高世著、松本義一校訂・解説

葎屋集　上巻

物集高世（もづめたかよ）は杵築の生んだ優れた国学者・歌人であるが、この葎屋集は明治十年、彼の六十一才の時に上梓された家集である。本書は二豊文学叢書の才一号として発刊されたもので、大分大学教授松本義一氏が正確詳細な校訂・解説を加えている。（B6判一二四頁謄写、大分市千代町二豊文芸学会発行、非売）

兼子俊一　編著

大分県の風土と沿革（風土篇）

半田康夫・富来隆　共著

大分県の風土と沿革（沿革篇）

本書は、先に発刊された「大分県政史」才二巻の中から、風土・沿革の部を特に県当局の諒解を得て各二〇〇部を限つて増刷したものである。風土篇には位置・面積・地勢・地質・気候・生物・災害・資源・人口等を収め沿革篇は原始時代より近世に至る郷土の歴史を概説している。（A5判、風土篇二六四頁実費二四〇円、沿革篇三二二頁、二七〇円、大分大学芸学部社会科研究会刊）

大会開催のおしらせ

本会の才三回大会を左の通り開催いたします。同好の士をおさそいの上、多数御出席下さいますようお願いいします。

一、日時　六月十七日（日曜）十時半――四時

一、場所　大分市金池町　大分市中央公民館

一、会次才

(1) 研究発表　十時半――十二時半

(2) 総会　一時――二時

(3) 特別講演　二時――四時（質疑懇談を含む）

宗麟没後の義統行状の一斑

別府大学教授　岡本良知氏

編集後記

★編集子のふてぎわの為に発刊がおくれたことをおわびします。本会発足以来才三年目を迎えますので、おくれをとり返えすべく七・八号を合輯、これを以つて才二年度を終ることにしました。あしからずお了承下さい。

★投稿の方が固定したような感じがします。皆さま奮つて御投稿下さい。論文（四〇〇字十五枚程度）はもちろんですが、資料紹介、歴史教育、新刊紹介、それに肩のこらぬ郷土史話、ハガキニュース等も是非お願いします。なお御投稿中には句読点のないものがあり、編集子や印刷者を悩ませます御同情下さつて句読点をお忘れなく。

★費用の都合で、図版・写真版掲載御希望の方は実費を御負担願います。抜刷も実費御負担にて御希望に応じます。

★次号から三十一年度に入りますので、会費（三〇〇円）を至急御納入下さい。前年度分未納の方もどうぞお願い致します。

★本誌について忌憚なき御意見をお聞かせ下さい。できるだけ皆様の御期待にそうよう努力いたします。

★会員諸氏の一段の御活躍を祈ります。

（半田）

昭和三一年六月十五日　印刷
昭和三一年六月十五日　発行
年会費　三〇〇円
分売は本号に限り　頒価　一〇〇円
編輯兼発行人　大分県地方史研究会　代表者　渡辺澄夫
印刷人　高井久男　大分市上野　電話一七七五
印刷所　三恵印刷株式会社　大分市駄原　大分大学学芸学部国史研究室内
発行所　大分県地方史研究会（振替口座下関五二四九番）